

興讓館高校バスケ部の皆さんに

皆さん、毎日お元気で勉学に、運動に熱心に励んでおられることと思います。私もその昔、バスケットボール部で一生懸命汗を流しましたこと懐かしく思い起こしています。体を鍛えることはいいことです。「健全な精神は健全な身体に宿る」という言葉がありますが、その通りだと思います。おかげ様で私も、もうじき 80 歳になりますがまだ元気で仕事しています。

何かの折にふれて書いた、私の体験談をここでお話し、皆さんに少しでも勇気を持っていただければ幸いです。

基金を創設していただいたとのこと、皆さんのお役に立てば幸いです。

私のカナダでの恩師（北大医学部出身、カナダに帰化ブリティッシュコロンビア大学名誉教授）で世界的に有名な J. A WADA 教授は次のような言葉を残しています

Today is the future、 the future is all yours.

将来は明るい。将来は皆様のものです。

大沼悌一
むさしの国分寺クリニック名誉院長

バスケットボールと私の軌跡（平成 13 年 11 月 朗球会 記念誌より）

大沼悌一（昭和 29 年卒）

1. 第一中学校時代

私は米沢市立第一中学校に入るとまもなくバスケットボール部に入ったが、その直接のきっかけはなんだったか覚えていない。

ただ当時興譲館高校のバスケット部員だった佐藤興一さんが週 2 回ほど指導に来ており、放課後彼と一緒に体育館で遊ぶのが大変楽しかった。鬼ごっこして遊ぶのであるが、つかまった人がまた鬼になり鬼は互いに手をつなぐので最後には体育館いっぱい横一列に鬼は増えた。そうすると逃げる人はどうしても鬼の列から逃れそうに思えないのであるが、佐藤さんはフェイントをかけて上手に敏捷にすり抜けるので彼を捕まえるのは容易ではなかった。

彼の敏捷な身のこなし方は驚嘆の的であり、いつか自分も彼のようになりたいと思った。佐藤興一さんは当時興譲館高校の学生であったはずだが、なぜわざわざ毎週我が中学まで来て、やんちゃな子供達を相手に熱心にバスケットボールの指導していたのか、その後長い間疑問に思っていたが、それが「置賜地区バスケットボール振興」という九里先生の考えであったことをつい最近になって知った。バスケットボールの手ほどきをしてくれた故佐藤興一さんに感謝する。

2. 米沢西高等学校（現・興譲館高校）のバスケットボールでの活動



S29.1.3 二中体育館（左恥が私）

われわれが入学したのは米沢女子高校と興譲館高校が合併して出来た米沢第一高等学校であり、最初の一年間は東校舎に通学した。しかしバスケットボール部の練習は西校舎で行うので放課後毎日東校舎から西校舎に通はなければならなかった。これが結構大変なので部員は減って二年目に西校舎に移ったときには三人だけとなっていた。

入学当時のバスケットボール部の先輩たちには、通称ダンカンと言われた鈴木茂さんのような傑出したすばらしい先輩たちが多数おり親密な指導を受けた。（写真：後列左端が三年生の私）近くのお寺での合宿練習ではトイレにしゃがむことが出来ないほど足腰の筋肉痛を覚えた。

三年になるとキャプテンの役をおおせつかり部員をまとめるのに大変苦勞した。腹痛に何回も襲われ、これは後でわかったことだが当時胃に穴が開いていたとおもわれる。しかし部活をやめようという気持ちは起こらなかった。

九里先生の広くて暖かい思いやりがあり、また燦然としたバスケ部の歴史があり、後輩たちも黙ってついてくるのでつらいとはいえなかった。困難な状況にあっても弱

音を見せず、皆の先陣を切って毎日練習に励んだことは私には大きな収穫であった。最大の収穫は「忍耐の心」であった。後に幾多の試練に遭遇したが、「おれはバスケットの選手で厳しい訓練を乗り越えてきた」という自信と忍耐が幾度も自分を救ってくれた。

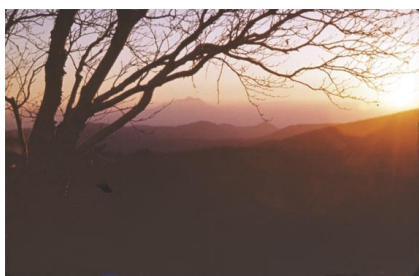
いつごろからか自分は医者になるという希望を抱き始めた。興譲館を卒業してから二年間の一般教養を山形大学で修め、その後国立の医学部の専門課程を受験することにした。そのためにいったんバスケットボールと決別して受験勉強に精を出すことにした。

高校卒業後まもなく九里先生の自宅を訪れ、その話をしたところ、朱子の漢詩を毛筆で書いてくれた。「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、未だ覚めぬ池糖春草の夢、階前の梧葉己に秋声」である。

この九里先生の書を自室の目の前にぶら下げて医学部進学のための勉学に励んだ。バスケットボールとはいったん決別する覚悟であったが、山形大学の学部対抗バスケットボールには出場した。久しぶりで工学部代表の鈴木さんと対戦し大敗した。

山形大学文理学部に籍を置いて一般教養に必要な単位を最短の一年半で終了し、あとはもっぱら自室に引きこもり一日 12 時間の勉強のノルマを自分に課した。国立大学医学部の入学試験の倍率は高く難関を極めていたが実際には入学試験は意外と簡単だった。「これじゃ逆に受験生を落とすのに苦労するだろう」とおもった。後で周りの人に聞いたら難しかったとのことで自分は大丈夫と思った。

3. 大学病院精神科とライフワークの始まり



S33 年十和田湖の日落

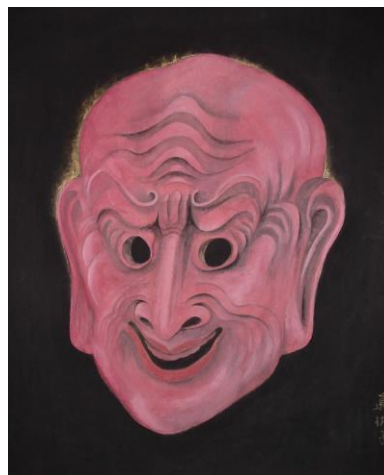
弘前大学医学部専門課程の四年間はあっという間に過ぎた。卒業後インターンを一年修め、精神科を専攻することにした。人間が好きだったからである。当時の大学病院は医師の卒業研修教育のシステムはまだしっかりしておらず、先輩のやり方を見真似するいわば丁稚奉公のようなものであった。大学の医局では研究至上主義が幅を利かせており、終日研究に没頭しその成果を学会に発表して多くの論文を書くことによって人物が評価されていた。

私も先輩の研究の手助けに多くの時間を費やし、手先が器用であったのでずいぶん重宝された。家に帰るのは常に夜中の 12 時を過ぎていた。大学で一年を過ごすとは地方の病院に派遣され、そこで始めて給料をもらった。大学にいる間はもちろん無給であった。地方に出たからすぐに医局長から電話があり大学に呼び戻され教室の主要研究テーマである「てんかん」を研究する様命ぜられた。これがその後の私のライフワークとなった。入局二年半でまだ十分に臨床医学を経験する間もないある日、「外国に行ってきた一年間脳波をするよう」命ぜられた。またとないチャンスではあるので喜ん

で引き受けたが、それが長い外国生活の端緒になるとは予想していなかった。



S36年 うちの嫁さん



うちの嫁さんが描いたお面

(九里先生からもらった面の模写)

4. カナダへの留学

留学に先立ち九里先生の自宅を訪れ日本を離れることを報告した。その際木彫りのお面の彫刻をいただいた。厳しい怖い表情のお面であった。このお面はその後 30 数年以上私の部屋の壁にかけておいたが、最近絵心が出てきた家内がこのお面を取り出し日本画風に描き同人会の展覧会に出品したらかなりの好評であったとのことだった。

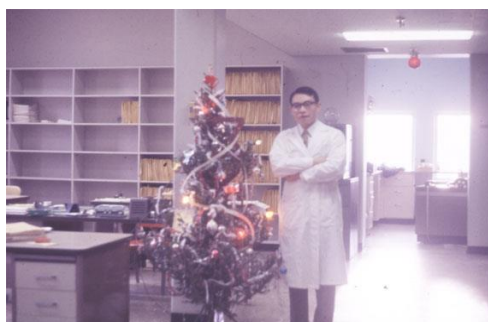
最初の留学先はカナダの中央平原にあるマニトバ州、ウイニペグ州立大学病院（ウイニペグ総合病院）であった。日本で受けた英語は全く通用しなかった。読み書きは



S39. カナダ・大平原の日没

出来るのだが聞くのとしゃべるのは全くだめで、「ドクター大沼は何年間英語を勉強したのか」とよく聞かれたが、日本で中学以来 15 年以上も英語を勉強していたとはとても恥ずかしく言えなかった。

全く知らない土地での生活であったがいかに大陸らしくのんびりした生活で楽しかった。二年目からは妻と二人の子供を呼び寄せ、カナダの生活をエンジョイできた。



S39.ウイニペグ総合病院での私

若い医師の研修システムは驚くほどしっかりしており、その点日本のシステムと大違いで雲泥の違いがあった。目を見張ることも多く、聞くも見るもすべて新しかった。私の仕事は脳波の判読であったが比較的ゆったりとしており、脳の神経生理学を勉強するには最適であった。

夏は短く冬は毎日零下 20 度という厳しさであったが人々は大らかであった。ここで長い冬のスポーツにバドミントンをおぼえた。今でもこれをやっ

ている。

留学期限の一年が二年になり「早く帰れ」と大学の教授より何回も催促があったが、研究以外にも患者を直接扱える臨床医学を勉強したかったので、アメリカにわたる決心をした。

アメリカ以外の外国の医学部を卒業した人が臨床に入って実際に患者を診るにはアメリカの決められた国家試験に合格する必要があるが、臨床医学と英語の試験があったが、これが結構難しいのである。日本の国内でもこの外国人のための試験が受けられるが成功するまでは通常数回失敗し、多くはあきらめるのが常であったが、幸か不幸か私は一回でパスした。それには 1,000 ページにわたる英文の医学原書を丸暗記したことが役に立った。

5. アメリカでの生活



S41.デトロイトの海浜公園で家族と

アメリカではデトロイト市のウエーンステート大学病院で神経学に進んだが、すぐに救急病棟に配属させられた。ここは人口 300 万のデトロイト市唯一の救急病院で毎日ほぼ 500 人の救急患者が運ばれてきた。

ここでの診療は私が未だ経験したことの無い壮絶な戦いであったといつてよい。交通事故、行き倒れ、銃撃による損傷、昏睡状態の患者などが次

から次へと運ばれてくるのであるが意識のない患者

者はほとんどが神経科に回され、私の受け持ちとなった。身元不明の患者も多く、男なら John Doe ○○、女性なら Mary Doe ○○ と名づけられ名前の後ろに当日の朝から順に番号がつくのである。救急室では的確な診察と緊急検査、緊急治療が要求された。48 時間以上眠られない日は当たりまえで一ヶ月間連続当直のような状態が続いた。

よく体が持ったものだ后感心している。これもバスケットボールで鍛えた賜物と思った。親切なフランス系の上司がいて助けてくれたのがありがたかった。ここでの一年間の訓練は日本での五年間ぐらいの訓練に相当する。ここで私は四年間の訓練を受け、何が来ても驚かない度胸だけは育ったといえる。四年経って気がついたら私はチーフレジデントとして、

一つの病棟を任せられ、新人医師の教育・訓練を行う立場に立っていた。専門医の試験にも挑戦し合格した。

ここに来て三年ほどたったとき、デトロイト市内で黒人暴動の嵐が吹き荒れた。ケネディ上院議員が暗殺された年である。市内に州兵と戦車が出動し市民に夜間外出禁止令がでた。われわれ救急病院の医師は全員、院内待機を命ぜられ緊急時に備えたが



S42.ハロウィーン・長女と次女

病院はまるで野戦病院の様子を呈した。

デトロイトの救急病院での研修は厳しいものがあったが、ここで、私と家族の生活も厳しかったことを述べておきたい。病院での給与は研修医の身分であったので薄給であった。研修医・レジデント給与は今のお金で換



S42.ワシントンの桜

算すると月約 30 万円程度であろうか、その内の三分の一はアパート代で消え、残りの 15 万円はほとんどが食費として消えた。覚悟の上ではあったがこれで家族四人のアパート暮らしは現実的に極めて大変であっ

た。家具、調度はすべて中古品であり、子供の洋服はすべて家内の手作りである。家内のオーバーコートが二人分の子供のオーバーコートへと変身した。また高度な自動車社会の大都会で、運転免許も車も無い生活はきわめて不自由であった。なにせ通常の人がやるように週一回の郊外へ食料の買いだしにも行けないのである。



S44.ヨセミテ公園・セコイヤの松

病院では正規の当直は研修の範囲内とされ、手当ては出なかったが、規定以上に当直することを「労働」と認めてくれたので助かった。この余分な当直一回で 60 ドル（この額は日本では想像できないほどの高額である）を支払ってくれる

ので、私は週一回のこの規定外の当直を買って出た。仲間の医師はこの当直を「汚い 60 ドル」(dirty sixty)

と呼んでいた。そして「今日は汚い 60 ドルかい？」というのが挨拶代わりとなっていた。

二年目にしてようやく中古車を買ったが、オイルを定期的に交換することを知らなかったため、エンジンを焼きこがしてしまった。エンジン始動のスターターが故障したので高い修理代を惜しんで中古のスターターを自分で交換した。ついでながら車の運転免許の話をしよう。自動車教習所というところはアメリカには無いのである。警察に行ってパンフレットをもらってきて、その最後のページに模擬テストと正解が載

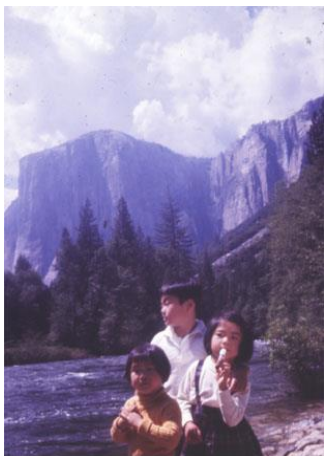


S44.リバティ島よりN.Yを望む

っている所以他们を読み、好きなとき警察に出頭し筆記試験を受けるのである。驚いたことには模擬テストがそのまま本テストとなっているのである。筆記試験に合格するとすぐ仮免許が与えられ、正規の免許証を持っている人が隣に座ってくればあと

勝手に路上訓練してよいのである。自信がいたら車持参の上再び警察に出頭し実地試験を受けるのである。費用は 5000 円もあつたら充分であつ

た。アメリカでの最初の二年間は、高度に発達したアメリカ社会の底辺で生きたとい
ってよい。孤独で知人は誰もおらず自分と家族が頼れるのは私の体だけだった。一人



S44.ヨセミテの溪谷

で崖っぷちに立たされたような毎日であったといっ
てよい。後に、有名な神経学の教授にこの話をしたら彼は笑って、研修医
の生活は誰でも苦しく、自分はドイツから移って来たとき、金
が無いので女房と駅のベンチで一夜を明かしたことがあると
話してくれた。ここでの三年目と四年目の生活はそれまでの生
活から一変した。実力が認められたせい
か給与が一気に5倍近く跳ね上がったのである。おかげで帰国してから120坪の敷地
に60坪の家が一軒建った。

アメリカの社会は厳しい実力・競争社会であり、下手をする
と同僚に寝首をかかれることもあった。死ぬのも自由であったが、
力があるのは伸びていくのである。後になって当時を振り返り、
よくもあんな苦しさを乗り切ったものだなと自分ながら感心し、これもバスケで鍛え
た「忍耐」が最大の武器になったことに気づいた。

6. 学生運動と医局長時代（弘前大学医学部）

六年間の留学期間を終了し日本に帰る決心をした。弘前大学医学部精神科に帰り助
手、講師となり学生や若手医師に神経学の講義をした。帰国後まもなく日本の大学医
学部特に精神医療界に旋風が巻き起こった。東大医学部から始まった学生運動は全国
的に広まり、安保闘争や日本赤軍の闘争とあいまって学生が講座制反対を掲げストラ



津軽の名峰・岩木山

イキを始めた。弘前大学も例外ではなく、特に精神科は「脱
精神病院」を旗印に若手医師を中心に荒れ狂った。当時私
は医局長の立場にあった。医局長というのは教室の大番頭
みたいな存在で、教授の意向を踏まえ研究費を管理し、若
手医師を地方の病院に配属させる人事権などを持っていた。
私もその任務に当たったが当然教授と一緒に医局長も
攻撃の対象とされた若手医局員は私の言うことを全く聴
かなかつたばかりでなく、従来の古い体質や教育制度や他
病院への派遣に関する人事について鋭く対立した。私はあ

くまでも対話を強調して徹夜で話しあいを持ったが、体力も忍耐力も私のほうが上手
であった。バスケットボールのおかげである。

新聞に私の部屋である精神科講師室で爆弾が製造されていると誤った報道がなされ、
警察の調査をうけたが若手医師や学生にはそのような危険があったのも事実である。
胃痛が何度か襲ったので調べてもらったら胃に穴が三個ほどあいており、古い潰瘍
の跡もあり胃は変形していた。一ヶ月ほど入院治療したがこれ以後現在まで胃痛は
ない。

7. 国立武蔵療養所（現、国立精神・神経医療研究センター）時代

東京にある国立武蔵療養所のでんかん病棟の医長として来て貰いたいという当時の



平成 7 年 8 月 白馬山頂、毎年登山した

所長の強い依頼があつて昭和 52 年に上京した。

国立武蔵療養所は古くから日本の精神医療の唯一の基幹病院であり、いわば日本の精神医療の中心でもあつた。700 床の病床があり、研究設備も整っている国立病院で、いわばお寺に例えれば、全国の寺院を統括する本山のようなところであつ



白馬岳山頂で一休み、平成 9 年 8 月

た。ここでの精神医療は疾患別に分けられており、統合失調症を中心とする急性期・慢性期病棟、認知症などを治療する脳器質疾患病棟、アルコール・薬物などの依存症病棟、てんかん発作で倒れる患者のてんかん病棟、それに社会復帰を目指す社会復帰病棟などがあつた。東大医学部の研究・治療病院的な側面がり、あんな化け物みたいな巨大な組織に地方の一医師が行っても潰されるだけだよと周囲は反対した。

確かにここの医師の大半は東大卒であり、地方

出身の医師は苦勞することが多かつた。ここには日本てんかん学会の事務局があり、私が事務局を担当し、てんかん患者や家族で構成されている日本てんかん協会の設立と日本てんかん学会の事務局として裏方をほぼ 20 年間担当した。そしててんかん学会理事、事務局長の仕事が評価され、日本てんかん学会名誉会員に推薦され、てんかん治療研究財団（平成 26 年）と日本てんかん協会（平成 27 年）から表彰状をいただいた。

8. 犀潟病院事件と人権問題（国立療養所犀潟病院）

平成 10 年 4 月、それまで 20 年間勤務した国立武蔵療養所（現国立精神・神経医療研究センター）から国立療養所犀潟病院（さいがた）に院長として赴任した。

病床数 450 床の新潟県南部にある精神神経疾患に関する国の基幹病院でもある。精神科救急医療と治療困難で難治な精神科患者の治療システムを整備する任務を受けての赴任であつた。



H11. 日本海に沈む夕日

しかし、赴任後一ヵ月目にして全国の精神病院を震撼させる事件が起きた。強制入院中の患者が拘束中に死亡した事件である。乱暴な患者は医師の判断で個室への隔離あるいは一時的な手足の拘束が許されるのであるが、本患者は医師の指示がなく病棟看護者の判断で夜間拘束されていたとい

うのである。

朝日新聞の一面トップに三段抜きで「国の基幹病院で精神障害者の人権が無視されている」という内容が報道された。入院患者がいつも無断で手足を縛られているかのように誤解され、いかにも悪徳病院のように報道された。病院と院長の責任が問われ、私は厚生省に何回も呼び出され、おかげで厚生省の役人とすっかりなじみになった。また彼らも数回にわたり来院し、過去数年間の入院患者の実態も調査された。さらに警察や法務局、人事院やまた学会幹部や患者集団まで押しかけてきて私は対応に苦慮した。

国は他の国立精神病院も同じような落ち度があるのではないかと全国規模での実態調査を行った。この事件は犀潟（さいがた）事件として連日全国的に報道された。新潟県から改善命令が出されたので、私は県庁に出向いて命令書を受け取ったがその際テレビの一斉放射を受けた。私は直ちに院内に特別調査委員会を設置して実態の解明と改善を図った。その結果患者の人権についてはほぼ完全に改善され、県からの追跡調査でも「ほぼ完全に改善されています。特に指摘することはありません」とのお墨付きをいただいた。

しかし一度信頼を失うとその回復は容易ではない。今でもこの問題は尾を引きずっており完全に回復するのにあと少なくとも10年はかかるだろうと思われる。世間の信頼を失うのは一瞬ではあるが信頼回復には何年もかかる。

わたしはこのような困難に遭遇したが特別身体的にも精神的にも参ることもなく処理することが出来た。犀潟病院には国立リハビリテーション学院があり、私が学



H12.妙高高原の秋

院長を兼ねていたが孫のような学生と一緒に毎週バスケットボールやバドミントンを楽しんだ。彼らは私の体がまだ動くことに驚きの表情を隠さなかった。そして私の退官の日には学生全員が色紙に寄せ書きをしてくれたがそれには異口同音に一緒にバスケットボールやバドミントンをやったこと、学生寮で一緒に酒を飲んだことが書かれてあった。まだ若い者と対等に付き合

える体力が残っているという事は、かつての学生時代のバスケットボールでの訓練のおかげだと思っている。

9. クリニックを開く予定

昨年無事30年間の国家公務員に終止符を打ち東京に戻った。

古巣の国立精神・神経センター武蔵病院にて現在週二日のてんかん専門外来を担当し若手医師の指導に当たっている。学会の理事とか東京地区の学会会長とか、また東京地方裁判所の民事調停委員などもやらされており、講演会などもたまに呼ばれるので退官してからかえって忙しくなった。これからはお役所仕事をすべてやめて小さなクリニ

ックを開こうと思っている。

今過去を振り返ってみるとバスケットボールで鍛えた「忍耐力」のおかげで、幾多の困難な問題に遭遇したがなんとか無事に切り抜けてきた自分に気付く。どんな困難が起きても「厄介で時間がかかる」とは思うものの「大変だ」としり込みしたことはない。

これも興譲館高校時代のバスケットボールでの訓練のおかげと思い、当時の部活を人一倍懐かしく思う。九里先生をはじめバスケットボールの諸先輩、および当時一緒になった皆様に感謝したい。

国立療養所犀潟病名誉院長、(元) 国立精神・神経センター武蔵病院外来部長
大沼悌一

追加

平成 27 年 10 月

日本てんかん治療研究財団、研究功労賞受賞記念随想録より抜粋

てんかんクリニックの誕生と発展

1. はじめに

一昨年（平成 25 年 10 月）に天皇陛下から瑞宝中綬章をいただき、昨年 3 月は益財団法人てんかん治療研究振興財団から研究功労賞をいただき、そして今年 10 月、日本てんかん協会より功労賞（木村太郎賞）いただき誠に光栄に思っています。勲章をもらうと、もう引退してゆっくり余生を送りなさいと言われていたような気もするが、これからも頑張りなさいという意味とも取れる。私はむしろ後者の方で、これまで、意の赴くまま動き回ってきたが、これからも精一杯活動しようと思っている。ついでながら付け加えさせてもらうが、65 歳の定年後に始めたヴァイオリンとバドミントンもほぼ毎日飽きもせずに行っている。

2. むさしの国分寺クリニックの開設

2-1) むさしの国分寺クリニックの患者数の推移

平成 12 年 3 月独立行政法人さいがた病院を定年退職し、古巣の国立精神・神経医療研究センターに戻り、そこで外来週 2 回ほど外来を担当させてもらった。そして平成 14 年 10 月むさしの国分寺クリニックを開院した。最初は 1 日数人の患者さんだけであったが、半年後に加藤昌明先生、さらに関本正規先生が加わり患者数は飛躍的に増加した。図 1 は過去 10 年間、毎月のレセプト枚数（1 か月間の来院患者数、月 2 回以上来院しても 1 と計算）を 6 か月ごとに区切って示している。平成 16 年に

は年間ほぼ 16,000 人だったのが平成 26 年には 25,000 を超えた。その 6-7 割はてんかんで、残りは一般精神科の患者さんである。私は全体のほぼ 4 割を担当しており、私の患者さんは 8 割方はてんかんである。平成 24 年 3 月、患者数が伸びて待合室が狭くなったので、国分寺駅南口から、現在の北口に引っ越した。職員も医師 3、看護師 3、脳波技師 3、事務職員 8 と増え、脳波計 2 台がフル活動している。診療は週 6 日、1 日 9 時間働いて毎日が大変忙しい。その上日曜日でも書類整理で出勤することが多い。

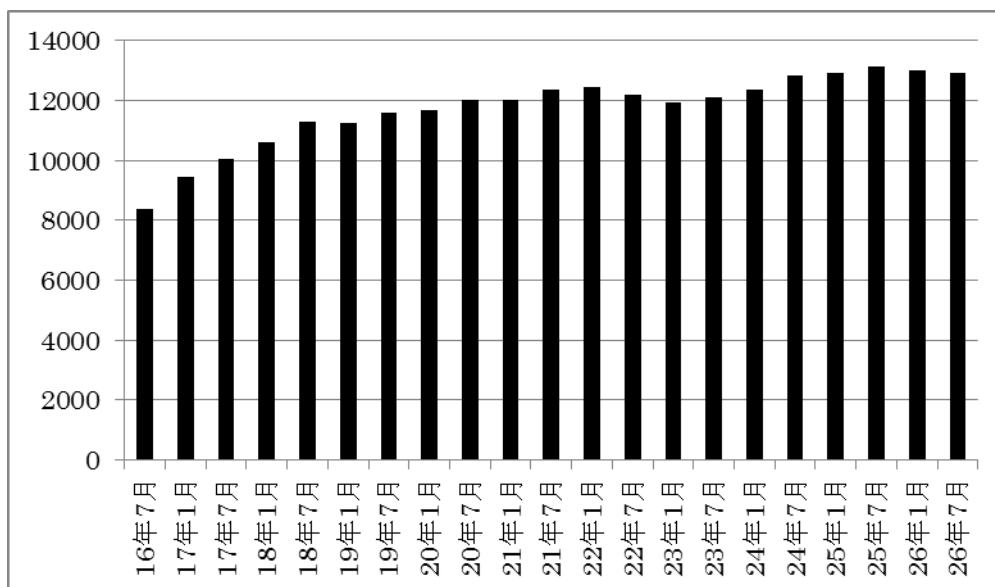


図 1 患者数の推移

3. ヴァイオリン事始め

1) 65 歳の手習い

私は大学の医学部 2 年のころヴァイオリンに興味を持って 1 年間ほど習ったことがある。しかしこれは到底身につかなかった。その後東京に出てきて、国立武蔵療養所（現国立精神神経医療研究センター）に赴任した。そして間もなく小学校に入った子供がヴァイオリン教室に通いだした。当時かなり有名な奥裕子先生のヴァイオリン教室である。これは後に知ったが、奥裕子先生は幼少時の千住真理子を育てた方で、確かに千住真理子の経歴を見てみると、奥裕子先生の名前が出てくる。我が息子のヴァイオリンは成長したかどうか私には分からないが、ヴァイオリンは子供用から次第に大人のサイズまで何回か換わった。そして最後に奥先生が推薦した大人用のヴァイオリンは高価な値段がついていた。私はその値段にびっくりしたが、先生は「良い音が出るのはこれぐらいするのが当たり前です」と澄ました顔で言った。しかし息子は中学に入ると突然、「俺はヴァイオリンをやめた」と宣言したので、せっかくのヴァイオリンはお蔵入りとなった。その後 20 数年経って私は新潟の地で定年を迎えようとしていた。週末はいつも東京に戻っていたが、ある日自宅の押入を掃除していたら、再びこのヴァイオリン

に出会った。そのうちいつか、誰かこれを使う人が出てくるかもしれないと待っていたが、誰も出てこなかった。仕方がない、誰もやらないなら俺がやろうと思ひ立ち、ヴァイオリン教室に通うことにした。ここではほぼ半年間ヴァイオリンの手ほどきを受け、そして私は無事定年退職した。

東京に戻ってからもヴァイオリンを続けており、もうかれこれ 12 年になる。なんとかヴァイオリンらしい音が出るようになった。

今使っている教材は兎東龍夫編の「新しいヴァイオリン教本」である。先日偶然、昔息子が使っていた同じ教本が出てきた。彼が 9 歳の時使ったこの第 4 巻を今私が使っている。ここまで来るのに息子は 4 年かかったが、私は 12 年かかった。この教材には当時の奥裕子先生の懇切丁寧で誠に的を得たメモ書きが残っている。「すべて暗譜するように」、「10 回（できるまで）繰り返す」、「中間音を忘れずに」、「弓先を使う」、「指の位置」などの確かな指摘が鉛筆書きしてある。幼少時の千住真理子もこの教材を使っただけで、同じような指導を受けたのかと思うと感慨深い。

The image shows a page of a violin score for 'Home Sweet Home' by H. Farmer. The score includes an introduction and several measures of music. Handwritten annotations in black ink are present throughout. A large bracket at the top left spans the first few measures and is labeled '暗譜' (Memorization). A callout box on the left points to the first measure with the text '弓先を使う' (Use the bow tip). A callout box on the right points to a measure with '10 回（できるま' (10 times (as possible)). Another callout box on the right points to a measure with '中間音を忘れ' (Don't forget the middle notes). A final callout box on the right points to a measure with '指のポジション' (Finger position). The score itself has various markings like 'Andante maestoso', 'con espress.', and 'p'.

付図 2 兎東龍夫編の「新しいヴァイオリン教本 第 4 巻」(奥裕子先生指導のメモ)

2) 室内楽団ができた

① アンサンブルむさしの誕生

ヴァイオリンを初めて間もなく、加藤昌明先生（現院長）が加わった。彼はピアノを弾くので、それに合わせていると、そのうちに音楽好きが集まり室内楽団ができた。プロの作曲家・指揮者に指導をお願いして毎月練習してきた。そして

平成 20 年 4 月 13 (日) 武蔵野スイングホールにて初めての発表会を開くことになった。座席 150、補助席入れて 180 がほぼ満席になった。当時のメンバーはピアノ 3、ヴァイオリン 5、チェロ 1、フルート 1、トーンチャイム&パーカッション 2、ギター1 である。現在でも月 1 回、定期的に練習会を開いており、私が関与する施設で何回か演奏会を開いた。

② トリオ三年一年の誕生

同じころ高校時代の同級生 3 人が集まってトリオ三年一組が出来上った。ヴァイオリン、ヴィオラ、バリトン歌手の 3 人である。そのうちのバリトンの歌う歌曲をヴァイオリン、ヴィオラで伴奏しようという話が出た。そしてついに横浜国立大学 0B で構成するウータンの会でモーツァルトの曲を演奏することとなった。無謀なる素人弦楽隊の伴奏に聴衆は驚き、笑い、そして拍手喝采した。その後もレパートリーが増え 20 曲近く増えた。そして私が併任している精神障害者福祉施設で年に 2 回ほど演奏会を開いている。

4. バドミントン

私はその昔、27 歳の頃カナダのマニトバ州ウイニペグに留学したが、寒い冬の季節に同僚から進められて、バドミントンに興じたことがある。その後昭和 55 年、44 歳で国立療養所武蔵病院（現国立精神・神経医療研究センター）に赴任し、その体育館でバドミントンを再開したが、所詮羽根つきの域を超えなかった。定年退職後バドミントン初心者講習会を受け、クラブに所属するようになった。勧められて地域のバドミントン大会に出たが、まったく歯が立たなかった。その後何とか発奮してほぼ毎日練習に励み、ついに東京都の予選を突破して、全国大会に出場できるようになった。年齢別クラスで、70 歳以上のクラスから始まり、今は 75 歳以上のクラスに出場している。

これまで出場した全日本シニアバドミントン選手権大会は平成 19 年（第 24 回、福井市）から始まり、ほぼ毎年出場している。今年は平成 27 年 11 月（第 32 回、福井）に行われるのでそれにも出場する予定である。なお全日本クラスになると、そう簡単には勝たせてくれない。基礎からやり直そうと考え、今上級者バドミントン教室に通っている。自分の欠点がよくわかり、超えるべきハードルが見えてきたのでまた面白くなった。

ついでながら、てんかん専門の医師にもバドミントンが好きな人がいて、声をかけたら数人集まってきた。それで 2 年前に、てんかん医バドミントンクラブ（エピ・ドクターズバドミントンクラブ EDB）を作った。ここ 2 年ほど、てんかん治療振興財団発表会の翌日に大阪の地で試合を行っている。

5. あとがき——継続は力なり、忍耐が大切——

クリニックも辛抱して続けていたら順調に成長した。最初は小さなクリニックなどと考えていたが、専門の心理士も加わり大きなクリニックになった。てんかんを中心とした単独のクリニックではこれ以上大きなものはないだろう。

ヴァイオリンも初めて人前で弾いたのは、習い初めてから3年ぐらい経った68歳のころだったろうか。ヴァイオリン教室の発表会で、「トロイメライ」と「白鳥」を弾いた。自分でも驚くほどみじめな音で、同席した妻は「心臓に悪いのもうあなたの演奏会には出ません」といった。

バドミントンも最初は年配のおばさんにも負ける始末で、人は私とペアを組むのを嫌がった。しかし辛抱して続けているうちに、「年取ったらあなたのように元気で動けるかしら」と驚きの声に変わった。

何事もそうだが、一生懸命やっていると必ず壁にぶつかる。どうにも越えられそうにない大きな壁に見える。試行錯誤しながらあきらめずに続けているといつの間にか、その壁をクリアしている自分に気づく。よくやったと自分をほめてあげたい気分になる。しかしすぐ次の壁がくる。この繰り返しが進歩の原動力になっているように思える。